

京都・東福寺 臨濟宗東福寺派大本山 日本最古にして最大級の伽藍 東福寺

<http://www.tofukuji.jp/>

動画 <http://www.tofukuji.jp/history/index.html>

東福寺は、臨濟宗東福寺派大本山で、日本最古にして最大級の伽藍を持つお寺です。

摂政九條道家が、奈良最大寺院の東大寺と、奈良で最も盛大を極めた興福寺から「東」と「福」の字を採って建立しました。嘉禎2年（1236年）より建長7年（1255年）までの19年もの年月をかけて完成されました。

創建当時の仏殿本尊の釈迦仏像は15m、左右にあります観音・弥勒両菩薩像は7.5mで、新大仏寺の名が付けられるほどでした。

明治14年12月に、仏殿・法堂、方丈、庫裡が焼失し、昭和9年（1934年）に落成して現在の形になりました。

開山国師の頂相、画聖兆殿司（ちょうでんす、明兆）筆の禅画など、鎌倉・室町期の国宝・重要文化財は、おびただしい数にのぼるといわれています。

東福寺は、何度も参拝していますが、2016年11月に私が訪れた時には特別拝観期間中でした。紅葉がとても美しい通天橋や普門院庭園を拝観できました。東福寺の楓は、宋国原産の三葉楓といわれています。葉先が三つに分かれていて黄金色に色づくのが特徴です。通天橋から眺める紅葉の景観は絶景ですが、私は臥竜橋からの眺めが好きです。

京都では最も遅い紅葉と言われますので、紅葉の最盛期よりは少々早めのために、緑色、黄色と赤のグラデーションを処々で楽しめました。最盛期には、緑の苔の上に紅葉した葉の絨毯ができ、拝観者を喜ばせてくれます。

また、国指定名勝「東福寺本坊庭園」も特別拝観ができましたが、今回は時間の関係上拝観せず、過去に撮影しました写真を当サイトで紹介しています。幸い、東福寺の塔頭のひとつであります臥雲山即宗院の特別公開を拝観できました。

創建と縁起

摂政九條道家が、奈良における最大の寺院である東大寺に比べ、また奈良で最も盛大を極めた興福寺になぞらえようとの念願で、「東」と「福」の字を取り、京都最大の大伽藍を造営したのが慧日（えにち）山東福寺です。嘉禎2年（1236年）より建長7年（1255年）まで実に19年を費やして完成しました。

イメージ図工事半ばの寛元元年（1243年）には聖一（しょういち）国師を開山に仰ぎ、まず天台・真言・禅の各宗兼学の堂塔を完備しましたが、元応元年（1319年）、建武元年（1334年）、延元元年（1336年）

と相次ぐ火災のために大部分を焼失しました。

延元元年 8 月の被災後 4 ヶ月目には早くも復興に着手し、貞和 3 年（1346 年）6 月には前関白一条経道により仏殿の上棟が行われ、延元の火災以降実に 20 余年を経て、再び偉観を誇ることになりました。建武被災の直前にはすでに京都五山の中に列せられていましたから、再建後の東福寺は完全な禅宗寺院としての寺観を整えることとなりました。

仏殿本尊の釈迦仏像は 15m、左右の観音・弥勒両菩薩像は 7.5m で、新大仏寺の名で喧伝され、足利義持・豊臣秀吉・徳川家康らによって保護修理も加えられ、東福寺は永く京都最大の禅苑としての面目を伝え、兵火を受けることなく明治に至りました。

明治 14 年 12 月に、惜しくも仏殿・法堂（はつとう）、方丈、庫裡（くり）を焼失しました。その後、大正 6 年（1917 年）より本堂（仏殿兼法堂）の再建に着手、昭和 9 年（1934 年）に落成。明治 23 年（1890 年）に方丈、同 43(1910)年に庫裡も再建され、鎌倉・室町時代からの重要な古建築に伍して、現代木造建築物の精粹を遺憾なく発揮しています。また、開山国師の頂相、画聖兆殿司（ちょうでんす、明兆）筆の禅画など、鎌倉・室町期の国宝・重要文化財は夥しい数にのぼっています。

開山 聖一国師

円爾弁円（えんにべんえん）といい、三井園城寺の学徒として天台の教学を究め、のち、栄西（建仁寺開山）の高弟行勇・栄朝について禅戒を受け、嘉禎元年（1235 年）34 歳で宋に渡り、在宋 6 年、杭州径山の無準の法を嗣ぎ、仁治 2 年（1241 年）7 月に帰朝しました。

まず筑紫に崇福・承天二寺を建てて法を説き、名声は次第に国内に及んで寛元元年（1243 年）には藤原（九條）道家に迎えられて入京、道家に禅観密戒を授けました。次いで東福寺開山に仰がれ、同 4 年（1246 年）2 月には山内の普門寺を贈られて常住しました。

その後、宮中に宗鏡録を進講し、後深草天皇の勅を奉じて、京都岡崎の尊勝寺、大阪四天王寺、奈良東大寺などの大寺院を観閲し、また時には延暦寺の天台座主慈源や東大寺の円照らを教導したので、学徳は国中に讃えられ、遂に建長 6 年（1254 年）には幕府執権北条時頼に招かれて、鎌倉の寿福寺に住することとなりました。

翌 7 年 6 月、一条実経の東福寺落慶供養にあたり帰山、爾来東福寺に住し、弘安 3 年（1280 年）10 月 17 日 79 歳で入定（にゅうじょう）しました。聖一国師の号は花園天皇より贈られたもので、日本禅僧最初の賜号です。

中国（宋）より帰朝にあたっては多くの文献を伝え、文教の興隆に多大の貢献をしましたが、また水力をもって製粉する器械の構造図を伝えて製麺を興し、今日、わが国最大のお茶の生産地となった静岡茶の原種を伝えたことも見逃せない功業です。

東福寺 看楓特別公開

看楓特別公開

紅葉がとても美しいこの時期に、特別拝観を開催中です。通常より 30 分早い 8 時 30 分より通天橋、普門院庭園の拝観ができます。さらに、国指定名勝「東福寺本坊庭園」を特別拝観できます。

東福寺の楓は宋国原産の三葉楓であり、葉先が三つに分かれていて黄金色に色づくのが特徴。その珍しさから「秋のすゑ」「洛陽の奇観」として有名です。地元京都では、立地条件の環境の関係から色づく時期が遅い事もあり、通天橋から眺める紅葉の景観は「秋の京都における最後の紅葉」として秋の名残りを惜しむ人々に愛されています。

期間 2016 年 11 月 1 日（火）～12 月 4 日（日）

文化財

東福寺には、鎌倉・室町期の絵画、開山聖一國師が宋より持ち帰った貴重な書蹟類、鎌倉期以来の文書などが多数所蔵されています。また境内の建造物も室町期以来のものが多数現存するなど、文化財の宝庫となっています。

拝観料

通天橋・開山堂 400 円（小中学生 300 円）

パンフレット http://www.tofukuji.jp/inquire/files/download/tofukuji_panflet.pdf

国指定名勝 東福寺本坊方丈庭園八相の庭 400 円（小中学生 300 円）

http://www.tofukuji.jp/inquire/files/download/tofukuji_hojogarden.pdf

アクセス・地図

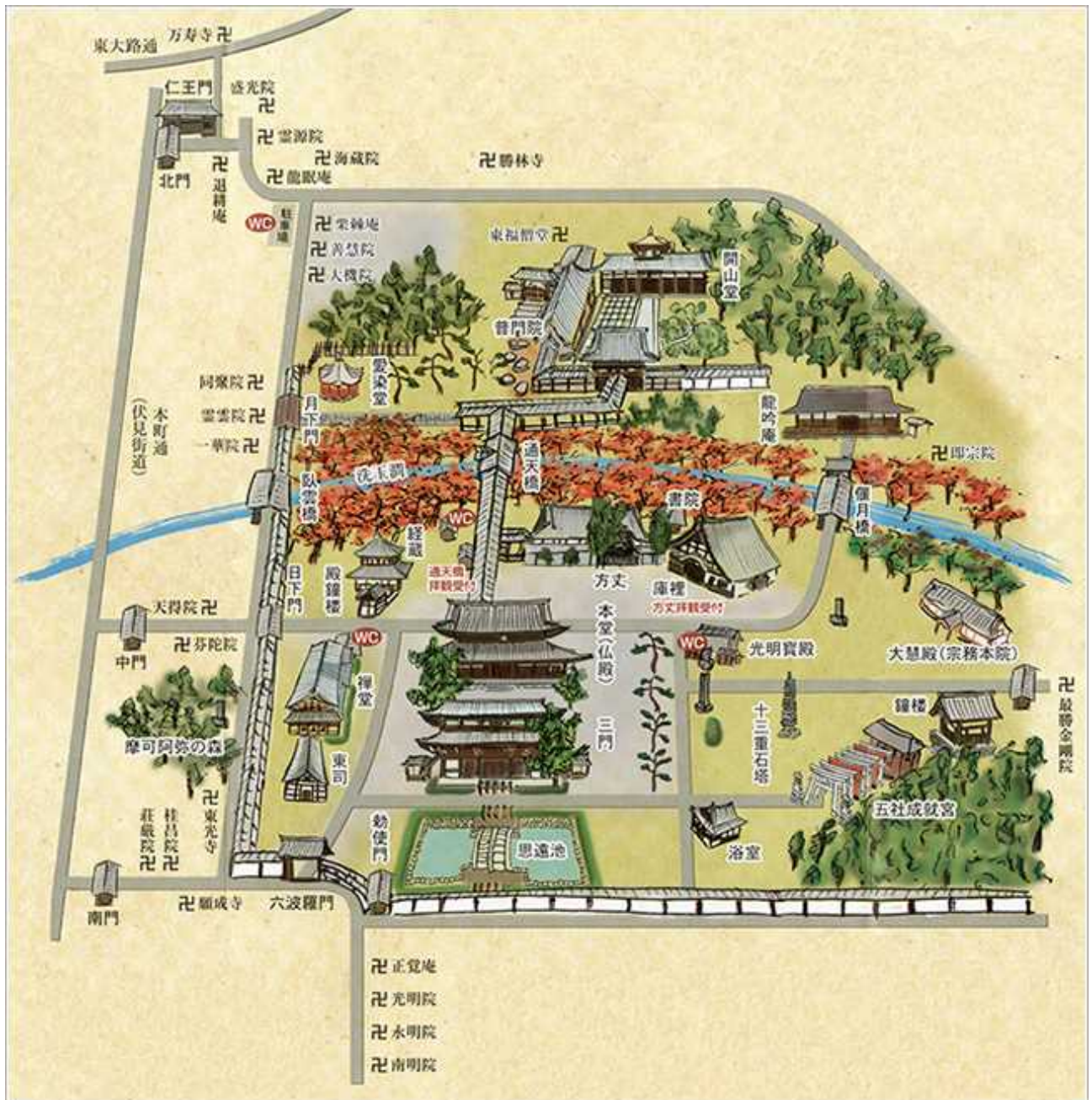
●JR 奈良線・京阪本線「東福寺駅」下車、

南東へ徒歩 10 分。

●市バス 202,207,208 系統

「東福寺」バス停下車。





伽藍

東福寺の伽藍は、上記のマップ（公式サイト）の通りです。

三門

南門から入り、六波羅門・勅使門を過ぎると、三門があります。応永 12 年に建立した三門は、京都五山の中では最も古く、国宝に指定されてみます。普段は登ることは出来ませんが、特別公開の時などは出来ます。足利義持の「妙雲閣」と記した扁額を掲げ、上層には釈迦如来と十六羅漢が安置されています。天井画も施されていますが、剥落が激しく、創建当時の姿は想像するしかありません。この三門は南禅寺・知恩院と並び京都の三大門と称されます。登ってみるとその名に違わず、雄大な景色が楽し

めます。<http://kyototownmap.com/page/tohfuku-temp.html>

東福寺へは、通常日下門から入ります。ところが寺院としての配置を見るためには六波羅門から入ると、伽藍配置がよくわかります。

東福寺には五重塔がありませんし、方丈の位置が三門、金堂と一直線上にありませんので、七堂伽藍ではないのです。

東福寺の三門は、南禅寺や知恩院と並び、京都の三大門と称されています。

この三門は、応永12年に建され、京都五山の中では最も古く、国宝に指定されています。

通常中には入れませんが、特別公開の時などに入ることができます。以前、幸運にも特別公開されていたので、登ることができました。東福寺の伽藍全体を望め、雄大な景色を楽しめたのは言うまでもありません。

足利義持の「妙雲閣」と記した扁額が掲げられています。上層には、釈迦如来と十六羅漢が安置されているほか、天井画も見られます。残念なことに剥落が激しく、創建当時の姿は想像することで心象図としてみることとなります

本堂（仏殿）

三門の北には本堂（仏殿兼法堂）があります。寺の中心的存在の本堂は、昭和の木造建築では最大の物で、正面7間、側面5間あります。天井の雲龍図は堂本印象が書いたもので、印象独特の繊細さが感じられます。中にはいる事は出来ませんが、本堂入り口は開いていて、本尊釈迦三尊像は正面に見えて、雲龍図は大部分が見えます。堂の東南の柱は日蓮宗の信者が寄進したもので、他宗の迫害を受けた日蓮を聖一国師が庇護したことから、感謝の気持ちを込めて用材を贈った前例があり、明治の再建時にも柱を寄贈したようです。本尊釈迦三尊像（本尊は立像、脇侍は阿難と迦葉）は、1881年の火災後に万寿寺から移されたもので、鎌倉時代の作です。本堂を過ぎると方丈があります。明治23年(1890年)に再建された建物で、表門は昭憲皇太后が寄進しました。東西南北には**八相庭**と呼ばれるそれぞれ趣の違う庭があります。西庭の石組は竜が海中から黒雲を得て昇天する姿をあらわしています。石と苔を幾何学的な市松文様に配した北庭が特に著名です。昭和13年に重森三玲が才腕をふるった庭として評価が高い。

<http://kyototownmap.com/page/tohfuku-temp.html>

三門の北にひときわ大きな建物があり、それが本堂（仏殿兼法堂）です。

寺の中心的存在で、昭和の木造建築では最大、繊細な天井の雲龍図は堂本印象が描きました。

中に入れませんが、本堂入り口は開いていますので、そこからは雲龍図を見ることができます。

本尊釈迦三尊像が正面にあります。本尊は鎌倉時代の作で、立像、脇侍は阿難と迦葉の三体です。1881年に火災に遭い、万寿寺から移されました。

禅堂・東司・浴室

東司（とうす）は、御手洗いのことですが、重要文化財に指定されています。俗に「百雪隠（ひやくせっちん）」と呼ばれています。日本最古で最大です。

東司は、通常は禅堂の横にありますし、ここ東福寺もそれに倣っています。

排泄物は、京野菜のための堆肥肥料として重要でした。現金収入としても不可欠だったのです。

禅堂は、禅宗の叢林（僧が集まって修行する場）で、重要文化財に指定されています。

日下門を入れて直ぐ右手にあります。

修行僧であります雲水が、座禅を組んだり、寝食を行ったりする場でもあります。多い時には400名を超える雲水が寝泊まりをしていました。

禅堂の大きさは桁行7件梁間4間ですから、そこに400人が寝泊まりするには非常に狭い気がします。

一重裳階（もこし）付き切り妻造りの本瓦葺きの建物で、叢林としては日本最大で最古の道場です。

浴室

東福寺の浴室は、禅宗伽藍の中で、現存最古のものです。

現在のサウナ式の風呂で、現在でも使用できるほど現代的なシステムが採用されています。

入浴も修行のひとつで、サウナ式とはいえ、そこで利用するお湯の量は莫大であったのではないのでしょうか。

後方に釜があり、東側に2つの蒸し風呂があり、板戸を建てています。蒸気はすのこを通して下から沸き上がってきます。

三門の東側にあり、桁行3間、梁間4間、一重正面入母屋造りで背面は切り妻作りです。屋根は本葺きです。

開山堂・普門院

こ方丈の北には開山堂と普門院（客殿）があります。開山堂は文政6年（1823年）、普門院は同9年の再建です。開山堂の屋根には伝衣閣と称する楼閣を載せています。この開山堂の姿は、楼閣を取って付けたような感じがして、何とも奇妙な感じがします。開山堂の前には、普門院の前庭として造られた池泉観賞式の庭があり、普門院から見ると白砂に石組と植込みで鶴島・亀島を配し、その後方を池泉庭園としています。本堂から開山堂へ渡す橋が通天橋です。天授6年（1380年）に春屋妙葩が谷を渡る労苦から僧を救うため架けたと伝えられています。昭和34年（1959年）台風で崩壊したが2年後に再建、その際橋脚部分は鉄筋コンクリートとなりました。この橋から眺める紅葉は絶景で、しばらく立ち止まって見入ってしまいます。通天橋から下に降りる事が出来るので、橋から眺めるだけでなく、下から見上げる紅葉越しの通天橋も素晴らしい景色です。東福寺は紅葉の名勝として知られ、シーズン中は平日であっても多くの観光客で賑わい、特に通天橋は立ち止まって紅葉を楽しむため、非常に混雑します。もしこの季節に行かれるなら、朝一番に行かれることをお勧めします。

方丈

本堂を過ぎると方丈があります。明治23年（1890年）に再建された建物で、表門は昭憲皇太后が寄進しました。東西南北には八相庭と呼ばれるそれぞれ趣の違う庭があります。西庭の石組は竜が海中から黒雲を得て昇天する姿をあらわしています。石と苔を幾何学的な市松文様に配した北庭が特に著名です。昭和13年に重森三玲が才腕をふるった庭として評価が高い。

本坊庭園とそのレイアウト

沿革

昭和14年6月27日～11月11日に作庭。昭和11年～13年末までの3年間の日本全国古庭園実測調査を終え、日本庭園史図鑑全26巻を発刊した直後の作品で、従来の日本庭園の意匠形態にはない、独自の新しい発想のもとに作庭された庭園である。各時代全ての庭園意匠を見てきた直後の作品だけに、全てにおいて意欲的な作品に仕上がっている。

本庭の意匠が画期的な形態となった大きな要因が、作庭にあたって唯一の条件として提示された、本坊内にあった材料は、すべて廃棄することなく、もう一度再利用するということであった。これは禅の教えである「一切の無駄をしてはならない」から提示されたことで、これによって三玲の設計は、ある意味において、かなり厳しい制約が課せられたということになる。しかしながら、これらの制約があったからこそ、逆転発想で、日本文化の伝統的な意匠である市松模様が生まれたり、また東側の庭園に見られる北斗七星を表した構成が誕生したのである。まさにリサイクルではあっても、そこに作庭された空間は、従来までの日本庭園からは考えられないほど斬新な庭園が生まれたのである。このような結果となったのも、制約された中の美を最大限に追求した結果であり、禅の修行をしたことのない三玲が、必然的に禅の境地に入る結果となり、まさに不思議な因縁を感じる次第である。

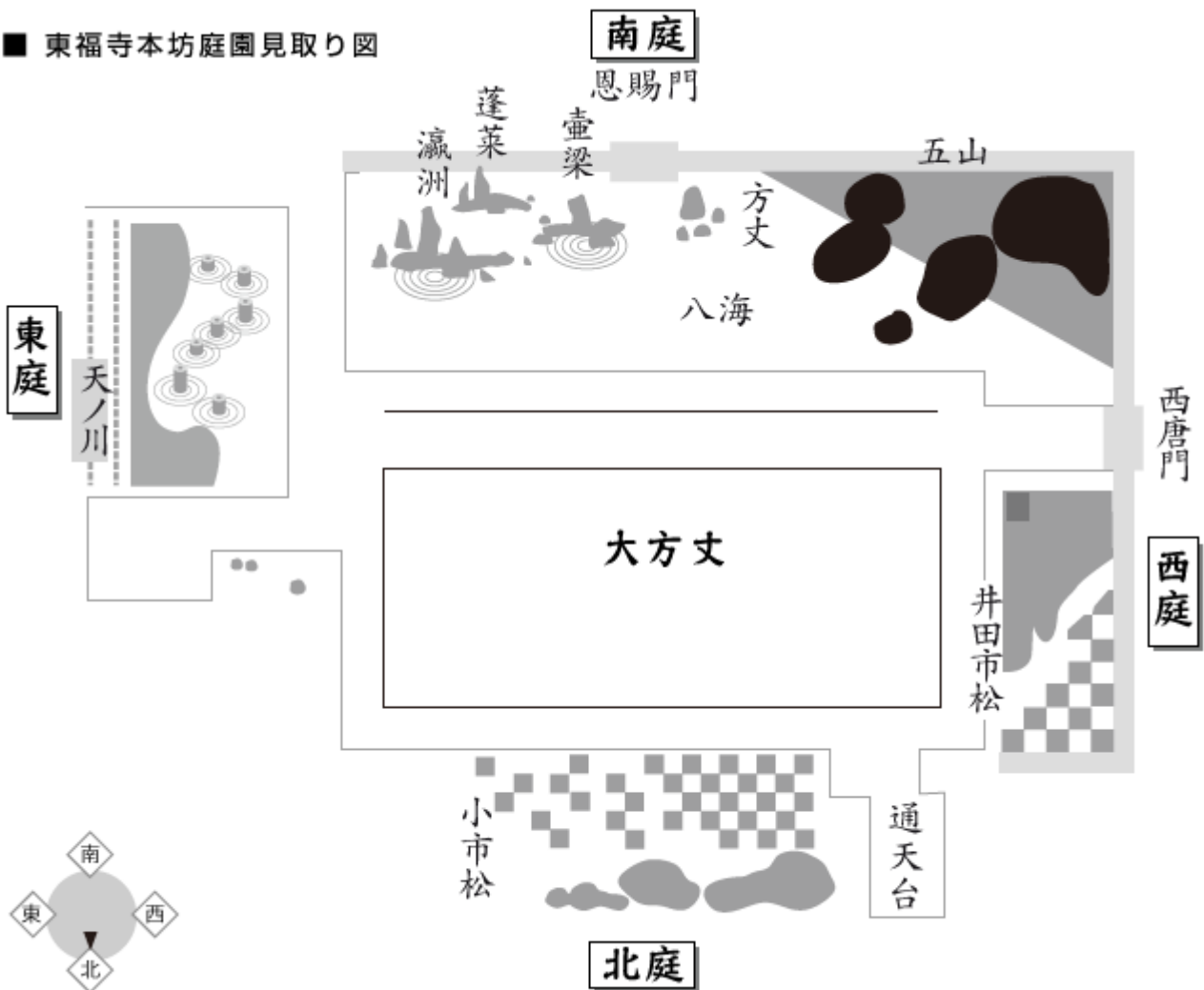
庭園概要

本庭の設計をするにあたって、最初から現在のような庭園設計をしていなかったことが、彼の残した資料などから知ることができる。

最初の計画では、いくつかのラフスケッチが残されており、六方石のような石を組んだ、三玲の郷里の近くにある自然の溪谷で「豪溪」のような景色を伴った意匠も考えていたり、また枯流のようなものを取り入れたりなど、興味深い計画案存在している。そして現在の神仙島石組と京都五山による苔山の意匠形態ができあがってくるのであるが、当初の彼の意図では、現在とは位置を逆に計画していた事が、彼の書き残したものから知ることができる。当時は、方丈から向かって右側(西)に老木の松が二本あり、これを移植して左側に持っていきこうと計画していたのである。ところが移植にかかる費用や枯死するおそれのあるリスクなどから、爾以三師などに強く反対され、結局、現在の姿になった経緯がある。

本庭は、東、南、西、北と、方丈を中心とした四方に作られ、それぞれの表現が異なる設計でありながら、全体のストーリーが繋がるような構成となっている。

■ 東福寺本坊庭園見取り図



しかもその構成は、日本庭園における伝統的な様式（枯山水）、手法（蓬萊神仙思想の表現）、意匠（市松模様）などを用いながら、設計されていることがわかる。

四方向に作られた庭園に込められた意匠構成は、東庭が「北斗七星」、南庭には四つの神仙島、京都五山、須弥山、西庭は井田を表した大市松模様、北庭が苔と板石による小市松である。西と北の意匠は市松ということで一つの意匠構成として考えられていたことが、作庭直後の昭和14年12月の京都林泉協会会報誌に書かれていることからわかる。北斗七星、蓬萊、瀛洲、壺梁、方丈、京都五山、須弥山、市松の八つの意匠を盛り込み、これが釈迦の入滅を表す「釈迦八相成道」にもあたることから、「八相の庭」と名付けられた。

以下は各々の庭園様式について纏め上げたものである。

重森三玲の想い

庭園を作庭していくことは、そこに作るという創意工夫を施すのであれば、古典には用いられていない、また誰もおこなったことがない新しい要素を取り込むことは重要なことである。しかしながら、それが独りよがりの意匠に走ってしまい、そこに思想性、哲学感、芸術性が感じられないのであれば、そんなものは作る必要性が無い。ところが三玲は、創意工夫をする際に、日本の伝統を知り尽くしたからこそ、次なる一歩が踏み出せたのである。これはどんな分野であっても同様であり、しかもその知るという行為は、幅広い視野を持ってあらゆる伝統文化の美を掴んでいってこそ、初めて新しいことができるのである。三玲はこのような下地を、学生時代から着々と積み上げてきた。だからこそ彼の新しい創作が、日本的なことから逸脱してしまうようなことを徹底的に避けながらも、新しい創作をとことん突き詰めた結果、本庭の作庭が、「現代の古典」となって成功した最大の要因であるといえる。正に終生の目標として掲げ、目指した「永遠のモダン」の始まりであり、彼の作品作りの基点になったのである。

http://tofukuji.jp/temple_map/hojo_overview.html

東庭



本庭の拝観は、先ず庫裡から進んでいく。程なくして庫裡と方丈を結ぶ渡廊下があり、そこで大抵の拝観者は左方向を見てハッとするのである。左には方丈の南庭が広がり、そこに存在する大きな石を用いた石組に先ず目が引かれてしまうが、その反対側に目を向けると、そこに広がる狭い空間の中には、反対の南側に見えている空間とは大きく異なる、まさに南側に見えてくる空間が「動」な構成だとすれば、まさに徹底的に省略した「静」の世界を表すかのような構成となっている。

東庭の表しているものは星座の「北斗七星」である。それを円柱、白川砂、苔、背後の二重生垣のみによって表現している。

北斗七星を表す円柱は、山内にある「東司」で使用されていた礎石で、東司の解体修理をした際に、余材として出てきたものである。早い話が廃材であるが、禅の世界では「一切の無駄をしない」という厳格な教えがあり、そこからこの材料を使用して欲しいという、当時の執事長であった爾以三師からの要望を受けて、円柱を天空に浮かぶ星として表現したのである。この円柱を使うという手法は、明治時代～昭和初期にかけて、京都を中心にして活躍した第七代小川治兵衛の有名である。小川治兵衛は、三条大橋や五条大橋で使われていた橋脚を払い下げ、それを使って平安神宮に「臥龍橋」と称して、池に沢飛石のような形で据え、それがあたかも龍の姿に見えてくる面白さを、円柱を使って表現している。さらに池の護岸やまた陸地部分に、伝統的な石組工法と同様に三本の円柱によって石組をするなど、当時としては画期的な手法を考え出して意匠しているのである。北斗七星の写真これはみれいは実測調査によって詳細に調べていたことから、東福寺で円柱を使用して欲しいという願いがあった時は、その使用方法に相当な産みの苦しみがあつたといつてよいであろう。

しかしそこは、多数の古庭園を実測調査によって得た膨大な情報と、さらに243庭の古庭園を取り上げた「日本庭園史図鑑 全26巻」を上梓した直後だけに、さまざまな古文献などを読破した結果、日本庭園と四神相応の繋がりが深いことを知り、そこから星座を用いることによって、先ず日本庭園史上初めての星座表現した手法となったのである。しかも星は必ず東から昇っていくこと、そして北斗七星は四神相応と深い関係があること、さらに小川治兵衛のおこなった伝統的な石組手法とは異なる表現方法で用いることができたことなど、すべてにおいて新しい手法を盛り込めたことは、まさに三玲の蓄積してきた庭園に対しての、新しい提示であり、しかもそれがすべて伝統に則った範囲の中で構成されたということも、まさに三玲らしい設計系になったといつてよいであろう。

本庭の七石の高さは、高・中・低のバランスを考えたりズミカルな構成となっている。北斗七星自体の星の明るさは、ほぼ同等の明るさであるために、ここで表現されたことは、実際の星の明るさによる高さの違いなどではない。逆に考えると、三玲の設計の中で、そのような具象的な方法を用いることは考えられず、まさに意匠的な創意工夫によって生み出されたと考えてよい。

背後には、二重生垣によって書院との仕切りを設けている。この二重生垣の手法も、大徳寺本坊庭園、孤篷庵方丈前庭などに用いられている手法が取り入れられ、ここでも古典的な構成を用いていることがわかる。

日本庭園の中において、星座表現という大胆な構成が取り入れられたが、これも単なるデザイン的なことや、思いつきだけでおこなったのではなく、伝統を知り尽くした、とても思慮深いところから生まれた、まさに新しい伝統の始まりといつてよいのではないだろうか。

南庭



特徴的な石組のこと

方丈の南側であるが、ここでは日本庭園における定型的な表現方法である、蓬莱神仙思想を中心とした意匠形態となっている。蓬莱、瀛洲、壺梁、方丈の四神仙島を石だけの構成による四つの意匠で表現した。その中の三神仙島(蓬莱、瀛洲、壺梁)には、6mほどの長い石を、立石とのバランスをとりながら横に寝かせて表現している。このような石の扱い方は、古庭園における意匠では、ほとんど例がない。三玲自身が戦前に実測した庭園の中には、そのような庭園は含まれていなかった。よって、この長石を使用することによって、極度なまでの立石を、この大きな横石によってバランスを保つようにしたところが、従来までの石組手法とは異なる新たな提案であった。これによって、三玲自身の新しい石組手法が確立されたといつてよいであろう。それほど彼にとってこの石組のもたらした意味は大きかったのである。彼が古庭園の中に大きな横石が使用されている例を知ったのは戦後のことで、この時の彼の心中は、やはり時代の先端を行く作庭家がいたことに驚きを持ったであろうし、また知らなかったことによる新しい自身の発案が、やはり先端的な造形感覚を持っているのだということを、改めて大いなる自信となって胸中に刻まれたのではないかと考えられることも、あらためて付記しておく。



-
-
-

築山

また南庭内にある築山にも、新しい息吹を吹き込んでいる。従来は自然の山の表現であった苔山を、京都五山として表現したのである。しかもここでは一切石を使用せず、山の大きさや高さによって、造形

的な美を追求したのである。また一番奥の築山と、その左側は、できるだけ土塀寄りまでたかさを保ちたかったので、最土塀寄りの部分は、建物からの観賞からは見えないように土留めの石積が成されている。このような手法も実測から得ており、彼にとっての古庭園内における工夫は、自身の作庭において一つ一つが大きな財産になっていることが伺える。

苔と白川砂の仕切

またこの築山のところは、斜線上に苔と白川砂の仕切りが設けられ、このようなはっきりとした直線構成を庭園の中に用いたことも、三玲らしい手法として受け止めがちであるが、これも江戸時代初期に活躍した小堀遠州の表現方法からヒントを得ていることは、容易に想像が付く。遠州は御所内において、切石による直線護岸の方形池や花壇だけの庭園を作っていることなど、相当に進歩的な庭作りをしていたことが知られているが、遠州に対しての果敢な挑戦とも受け取れるのではないだろうか。またこのように斜線による構成のため、次の西側の庭園へと繋げていく動線的な役割も示しており、この手法は、この後続く西側、北側の庭園においても用いられ、本庭の暗示的な線構成とも取れる。

西庭（井田の庭）について



西庭の大市松模様「井田の庭」は、日本古来から伝えられてきた伝統的な市松模様を、サツキの刈込と葛石の使用によって表現した。

この西庭の意匠は、北庭と同様に、この本坊内に使われていた材料で、敷石の縁石(カズラ石)を再使用してできあがった意匠である。カズラ石や板石は、素材は天然であっても、人が細工してできた材料であり、しかも直線であるために、敷石などの歩く場所などに使う際には好適な材料であるが、自然の山を模した築山や石組、樹木などを植えたところに使うのには、難しいというよりも、通常の庭造りでは考えられない材料であるといつてよい。それでも使用しなくてはならなかったことから考え抜いた末に辿り着いた答えが「市松」だったのである。市松は日本の伝統的な紋様であり、桂離宮内の松琴亭の襖や床に使用され、また修学院離宮などの茶席の腰張りに使用されたりなど、雅な文化の中において使用されていたことがわかる。また東福寺山内においても、通天橋を渡りきった奥に普門院(開山堂)内の枯山水部分に、綺麗に描かれた市松の砂紋があり、これを三玲は昭和13年2月に実測していることから、この砂紋による市松の美にも引かれていたことが、彼の記述したものに残されている。しかも普門院内

の砂紋の描かれている地割を見てみると、明らかに西庭と北庭部分の地割との関連性があり、ちょうど設計に取りかかる直前でもあったために、普門院の市松砂紋からの影響が最も大きかったといえるのではないだろうか。しかも普門院は、東福寺の開祖である円爾弁圓師であるために、より一層、本坊内においての作庭に用いたと考えるのが本筋ではないだろうか。



-
-
-

この地割も斜線上に市松を組み、北側の小市松模様已经连续して繋がっていくことを意図して設計されていることがわかる。それをサツキの刈込と白川砂との、はっきりとした色のコントラストを持って表現し、さらに作庭された当時の写真を見てみると、サツキの高さが縁石から 3cm ほどしか出ていないために、現在とは異なって、大きな市松模様に見えていたのである。そしてそれを斜線上に北側に結びつけていることから、現在のサツキが高くなってしまったものと比較すると、大きく異なっていることがわかる。

またこの西庭の南西の角に自然石で三尊石組があるが、これは東庭の北斗七星による七石、京都五山の五つの山と組み合わせると「七五三」になっていることがわかる。しかも、何れも素材異なる七五三という手法も、それまでの古典庭園にはない手法であるために、七五三表現でさえも、三玲による新しい提示があることがおもしろい。そしてこの事に関しては、彼は一切の記述をしていないために、まさに現場と図面を見ることによって初めて気がつくように配置されており、庭園とは単に観賞するだけでなく、まさに思惟することを求めていることが、本庭が、単にデザインだけを追い求めた新しい庭作りをするという単純な形態ではない、まさに禅的な意味合いを深く持たせた庭園であることがよくわかる。

北庭のこと



勅使門から方丈に向けて敷き詰められていた切石を再利用してできあがったのが北庭の小市松模様の庭園である。まさに西庭の大市松を受けてさらに小さな姿となり、そして東北方向の谷に消えていくという表現方法である。

本庭の最初の部分は、西庭の市松を受け継いでいるために、ほぼ正確な市松で配置されているが、程なくしてそれが崩れていき、そして最後はポツン、ポツンと一石ずつ配しながら消えていくという配置構成になっている。この最後に一つずつになるような所は現在のような苔ではなく、白川砂内におかれていたことが、やはり作庭直後の写真を見ると判る。しかもこの白川砂と苔との仕切の線が、三玲が得意



とした州浜状の曲線が用いられており、この辺りのコントラスト

も考えたうえでの設計であったことがわかる。

このようなヒントを思いついたのは、三玲自身が、学生時代に日本画の勉強をしていたことが大いに役立っている。絵画の世界では、境目の部分をぼかすことによって、多彩な表現を試みるが、庭園の世界では、ボカシという表現方法は見当たらないのである。ここに着目できたのも、三玲が絵画の分野で勉強したことが、大いに役だったのである。さらに、東福寺本坊庭園を設計する直前まで、日本全国の古庭園実測調査大きな要因といえる。

現状においては、この州浜状に区切られた苔と白川砂の線は、完全に苔に覆い尽くされている。日本庭園で使用する地衣類は、やはり苔が抜きんでた美しさをほこるが、苔の生育条件はとても厳しく、維持するだけでも大変な労力が必要である。ところが東福寺本坊においては、ちょうど真横に谷があって川が流れており、苔の生育に適した空中水分が得られることから、白川砂内にどんどん苔が繁茂していき、その結果、現在のような状態になっている事を付記しておく。しかしながら、現在の状況も大変美しく、苔の中に散らばる板石の風情も捨てがたいものがある。竣工した当初の写真や、設計図、三玲の書き残したものなどは、資料としてしっかりと残されているので、現状がどのように変化していても、ただちに竣工時の姿に戻すことは可能である。そこで現状の苔に覆われた姿を維持していくことも良いなのかも知れないと思っている。

http://tofukuji.jp/temple_map/hojo_north_garden.html

東福寺三名橋

東福寺の溪谷「洗玉澗」(せんぎょくかん)に架けられた3つの橋は、「東福寺三名橋」と呼ばれ、上流から順に偃月橋(えんげつきょう)、通天橋、臥雲橋(がうんきょう)となっています。

偃月橋(えんげつきょう)

東福寺を流れる「洗玉澗」(せんぎょくかん)には、上流から偃月橋(えんげつきょう)、通天橋、臥

雲橋（がうんきょう）の3橋があります。いずれも屋根のついた木造橋廊です。

偃月橋は、3橋の最上流に架かる橋です。東福寺の方丈横の先が左折れしている道を左に曲がりますと正面に見えます。

1603年建築の重要文化財で、単層切妻造の棧瓦葺きの橋で「日本百名橋」の一つです。通天橋や臥雲橋に比べて訪れる人も少ないのか、百名橋をじっくりと鑑賞できます。

通天橋

通天橋は、仏殿・方丈から開山堂（常楽庵）に至る溪谷「洗玉澗」（せんぎょくかん）に架けられた橋廊です。

1380年（天授6年）に春屋妙葩（しゅんおくみょうは：普明国師）が谷を渡る労苦から僧を救うため架けたと伝えられています。

南宋径山（きんざん）の橋を模したもので「通天」と名付けられた。

現在の通天橋は、1959年（昭和34年）に台風で倒壊した後、1961年（昭和36年）に再建されたものです。

ここからの紅葉と新緑は絶景です。

黄金色に染まる三ツ葉楓は開山の聖一国師が宋から伝えた唐楓といわれています。

臥雲橋（がうんきょう）

東福寺を流れる「洗玉澗」（せんぎょくかん）には、上流から偃月橋（えんげつきょう）、通天橋、臥雲橋（がうんきょう）の3橋があります。いずれも屋根のついた木造橋廊です。

臥雲橋は、3橋の最下流に架かる橋です。電車やバスで歩いて行きますと、最初に見える東福寺の建物は、左手に見えてくる月下門です。その正面が臥雲橋で、個人的にはここからの東福寺が最も美しいと思っています。

臥雲山即宗院

臥雲山即宗院は、東福寺の塔頭のひとつです。

薩摩藩東福寺城の守護大名六代目島津氏久（1328～1387）の菩提寺です。剛中玄柔和尚を開基として創建されました。一旦消失しましたが、山門は創建当時のものです。左右の仁王像は石像で珍しい存在です。

月輪殿

平安時代後期、関白藤原忠道は、ここに御所の東御堂を建立、その子兼実の別称「月輪殿（つきのわどの）」から、山荘としてこの名を称し、利用しました。

公開されたのは、ここの庭園で、その跡地に作られました。室町時代後期の供花寝殿造りの流れを汲む造園です。カギの手錠の池や滝などに往時が偲べれます。京都市史跡に指定されています。

西郷南州隆盛自筆による薩摩藩士東征戦亡之碑

西郷が幕軍の難を逃れるために即宗院の一面に採薪亭という茶亭を作り、ここから密令を出していました。慧日山（えにちざん）の裾野にあった採薪亭は現存しませんが、自然居士を偲び一字の草庵としました。裏山山頂には砲列を敷き、幕軍に砲撃を加えました。

倒幕後、明治維新で戦死した霊を供養するために524霊の揮毫を行い、東征戦亡之碑を建立しました。この中には生麦事件の奈良原喜左衛門や人切り新兵衛と呼ばれた田中新兵衛の墓碑も含まれます。